

の明手に進進するやうになるのである。

(ホ) 無論、ブルジョア階級に對する労働者農民の全政治的
闘争を統一的に指揮する目的は、プロレタリアート階級であるが
我々のやうに労働者階級と密接に結合しなればならぬと
ころでは、プロレタリアート階級は、労働者と農民を同一の政
治闘争に動員するための政治的組織——労働農民同盟もしくは
労働農民の如き——が必須になつて来る。現在、かかるものとして
成立されてゐるものが労働農民は、だから、労働農民の政治闘争の動
員を中心任務とし、そのために、不慮に自身の勢力を犠牲しなければ
ならぬのである。

(ハ) わが労働農民は、以上の任務を達成するに際しては、左翼
労働組合、農民組合の擴大強化をもその中心任務の一つとしてゐる
事でもなく、現時的労働組合や農民組合を擴大強化せしめる
ことなくして、労働者農民の活動なる政治闘争を遂げることは全く
不可成である。わが黨は、如何なる状態をも迎へて、現時的な
労働組合、農民組合の擴大強化を計るべきである。わが左翼陣営内
の十六の現時的労働組合の組織的解決は、そこから始まる。

(ト) だが、左翼陣営内の一部には、かく主張する人々がある。
一労働者の擴大強化に於てあるやうな、合時的労働組合や農
民組合は、よしそれが、いかに現時的のものであらうとも、結局そ
れは、黄色組合にすぎない。又労働者支持の労働者のスローガン
を掲げて進む純然たる赤い労働組合(即ち革命的農民組合)以外の
いはゆる「大衆組合」の擴大強化に努力するやうなことに、結局、

反動的なことを、舉げてしまつたらうか。我々は認めて置かうと答へる
はしいことは、それら労働組合、農民組合の擴大強化に關する
闘争において進めることである。一切の政治的組合は黄色組合だ
といふやうな機械的の論議は、さしつかへなく、一切の労働
組合や農民組合を黄色組合呼ばりしてそれを一律に排斥するや
うな論議は、たしかに誤謬である。

(チ) 勿論、現在の所謂「大衆労働組合」や農民組合が革命的な赤
色組合だとは、我々と懸隔を考へてゐない。それらの組合は、無
化され強化されねばならぬ組合である。だが、それらの組合は決
して、革命民衆的黄色組合ではない。従つて、眞實に革命的
な闘士ならば、それら組合の中へドクトリン導入して行つて、自ら
先して大衆闘争の尖端に立ち、それらの組合を腐敗化し、強化し、
擴大化することに努力すべきである。組合の指導者等はそれをこ
ろではゐないのだ——然るにそれらの組合が、又労働者支持の
スローガンを掲げてゐないからといつて、向にそれを黄色組合呼ばり
して、一律にそれを排斥し、無視しようとする論議は、向に
は斷じてワルトワットの的である。

(リ) 現在の左翼組合が反動的役割をつとめてゐるなどといふ考
へは全く六六カしい考へだ。それらの組合は現在労働者農民の利
益の擁護伸張の爲めに、相當に眞實な役割をつとめてゐる。この
眞實な現実の事實を看過すべきでない。一切の合法的組合と非合
法的組合とを對立せしめ、それが互に排斥するものであるかの如く
考へる事が、第一に誤謬だ。我々は眞實に、誠意をもつて、十八の

左翼的な労働組合、農民組合の擴大強化に於て、加入なる労働
大衆を一刻も早く大衆階級に結合することに努力すべきである。
(ヌ) 第三の任務——マルクス主義の旗の元への戦闘統一の既
成は別に述べる。

(ロ) 更に、労働組合、農民組合との協力による全被壓迫階級の
日常經濟的の擁護伸張に關しては、我々の任務に就いては、何等
の責任も負はざらばいべきである。

三、労働農民に對する我々の反對論とそ れに對する我々の意見

(イ) 我々の意見の總論に對しては、最初から我々の反對がまさしく
されて来たが、最近に至つて、今度は、我々の一部のインテリゲン
ト階級が、突如、無言をさけ出し、今では黨外に居て、我々の
の活動を我々に攻撃してゐる。それら階級の活動は、勿論、我々に
かかるにも及らぬが、然し、それらの反動的論の中は最も代表的な二
三の意見を掲げて、それらに對する我々の意見を述べることとする。

(ロ) 第一の反對論は「プロレタリアート階級の間に、それは何
個の階級を作ることは總論に間違ひだ」といふ意見であるが、我々
は此意見を、今や、見放すほどの意見だと思へて居る。なんとなれば
我々の樹立したのは、一個の労働農民同盟であつて、我々は、コミンタ
ンの日本支部のほか、更に別個のプロレタリアート階級を樹立した
のではない。だから、我々の黨が樹立されたからといつて、それに

よつて直に、我々が二つの指導部が世れたといふ考へは全く無
義の論議の樹立によつて「プロレタリアート階級は一つだ」といふ
取柄が破壊されたと思へることは、たしかに我々の認識である。現
在、コミンタンの日本問題に關するテーゼは、我々のプロレタリアート
黨が、その指導下に労働農民を擁護せしむべきだといふ意見を述
べて居たし、また、コミンタン西歐支部も、労働農民が解散さ
れた直後に、日本支部に向つて労働農民の再編を指令してゐる。
又、コミンタン第六大の「植民地半植民地に於ける革命運動に
關するテーゼ」は、「労働農民はあまりにも容易に普通プロレシ
ア階級に同化するから、労働農民を作ることは好ましくない」と主張し
その論議から、労働農民の樹立を否定して居るが、労働農民が樹立
されたならば「プロレタリアート階級は一つだ」といふ原則が破
壊されるから——言ひ換れば二つの指導部が生れるから——好まし
くないといふやうなことは、考へて置かうべきでない。それを見て、
「プロレタリアートの階級は一つだ」といふ理論を論議することに
よつて労働農民を破壊することが見放されたといふことは全く明かであ
る。問題の中心點は寧ろ「餘りにも容易に普通のプロレシヨニア階級
に同化する」危險性を持つ労働農民を、あの場合に、樹立したのが正
しかつたか否かである。

(ハ) 我々は、無論、それを正しかつたと思つてゐる。殊に、
當時の情勢を考へて見よ、當時プロレタリアートの黨が、殆んど徹
底的に破壊され、左翼労働組合もまた、我々その合法性を奪はれて
行き、農民大衆は、或ものは既に社會民主主義政黨の傘下に走り、